

民を心にかけてくださる神

吉 田 雅 人

奨励者紹介〔よしだ・まさと〕

日本聖公会司祭

ウイリアムス神学館館長

それから間もなく、イエスはナインという町に行かれた。弟子たちや大勢の群衆も一緒であった。イエスが町の門に近づかれると、ちょうど、ある母親の一人息子が死んで、棺が担ぎ出されるところだった。その母親はやもめであって、町の人が大勢そばに付き添っていた。主はこの母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくともよい」と言われた。そして、近づいて棺に手を触れられると、担いでいる人たちは立ち止まった。イエスは、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言われた。すると、死人は起き上がってものを言い始めた。イエスは息子をその母親にお返しになった。人々は皆恐れを抱き、神を賛美して、「大預言者が我々の間に現れた」と言い、また、「神はその民を心にかけてくださった」と言った。イエスについてのこの話は、ユダヤの全土と周りの地方一帯に広まった。

(ルカによる福音書 7章11—17節)

主よ、わたしの岩、わたしの贖い主よ。どうか、わたしの口の言葉が御旨にかない、心の
思いが御前に置かれますように。アーメン

先日、4月14日と16日に熊本県や大分県を中心に起きた熊本地震と、現在の状況について、私が属しています日本聖公会の熊本聖三一教会牧師である山崎司祭からお伺いする機会がありました。山崎司祭によりますと、熊本県内にある三つの教会がすべて被災しました。熊本聖三一教会は、屋根瓦が落ち、壁に亀裂が生じ、また天井板もはずれたそうです。そして礼拝堂内の洗礼盤が倒れて破損し、納骨堂の棚が倒壊ということでした。会館、牧師館内部も照明器具やエアコンがはずれ落ち、家具が壊れるなどの被害があったそうです。また、国立療養所菊池恵楓園内にある菊池黎明教会でも、礼拝堂の天井や壁に亀裂が入って危険となったため、礼拝堂での礼拝を中止しているそうです。社会福祉施設リデルライトホームと、その中にある降臨教会礼拝堂は、壁や備品の一部が損傷しました。しかし、いずれも人的な直接の被害を受けずにすんだのは、ある意味で幸いでした。

山崎司祭によりますと、14日の1度目の地震の時にはまだ大丈夫だったけれども、16日の未明に起きた2回目の震度7の本震時には、倒れてきた本棚の下敷きになって、司祭自身が気絶してしまったということでした。彼は私と同じ世代の聖職で、体なんかは私よりがっしりしておられる方ですが、それでも気絶するぐらいですから、よほどきつかったのでしょう。それ以上に、今も268名の方々が生活しておられる、国立療養所菊池恵楓園の入所者さんたちは高齢のこともあり、どれほど不安だったかと思います。また梅雨に入り、テント村も閉鎖されて、より厳しい状況におかれることになった被災者の方々を思いますと、言葉ありません。

日本聖公会九州教区では、「九州地震被災者のため」の祈りを制定され、日本聖公会全教会に、折に触れて祈ってくださいと呼びかけておられます。その祈りの中に、「一瞬にして、大切な家族や友人をなくし、茫然と立ち尽くす人びとがいます。…どうか主が、共にいてくださいますように。…どうか主が、癒しと希望をお与えくださいますように」という祈りの言葉がありますが、心からそのように祈り続けたいと思います。

すべてを奪われた者

さて、さきほど朗読していただきましたルカによる福音書には、ナインという町で起きた悲しみの出来事、大切な家族をなくし、茫然と立ち尽くす人の物語が語られています。

このナインという町は、イエス様の故郷、ナザレの村の南東約9kmのところにありました。この当時は城壁で囲まれた、比較的大きな町だったようです。イエス様や弟子たちが、この町の門のところまで来た時、葬式の行列に出会いました。それはこの町に住んでいた、あるやもめの一人息子のお葬式だったのです。

当時のイスラエルのお葬式は、亡くなった方の遺体に香料などを塗り、亜麻布で包んで埋葬の準備をした後、家の高い部屋に安置したそうです。そこに親族や隣人が最後の別れを告げに来るのですが、暑い地域なので、遺体は死後8時間以内に埋葬されたそうです。遺体は蓋のない棺か担架に乗せられ、親族や友人が死者に対する最後の愛情を表すために交代で棺を担ぎました。幼児は抱いて運ばれたようです。葬送の行列は悲しみを表すために非常に騒々しく進んだそうで、どんなに貧しくても配偶者を亡くした時には、最低二人の笛吹きと一人の泣き女を雇って礼節を尽くさねばならないという決まりがあったと言われています。

しかし一般的にはそうであったとしても、一人息子を失った母親にとっては、たった8時間ぐらいいは嘆き悲しむ暇もなく、隣近所の人々の助けを借りて、やっとの思いでお葬式を出したのでしょう。もっとも、聖書は「ある母親の一人息子が死んで、棺が担ぎ出されるところだった。その母親はやもめであって、町の人が大勢そばに付き添っていた」と、さりと情景を描いているだけです。彼女の一人息子がどんな理由で死んだのか、彼女が今、どのような思いでいるのか、聖書は何も語らないのです。

しかし、この葬列に付き従う母親の思い、その心の傷の深さは、私たちにも何となく想像することができるでしょう。夫に先立たれ、今度は頼りにしていた一人息子をも奪われてしまった母親の悲しみ、彼女の心の傷は、どのような盛大な葬儀にも、どのようなやさしい慰めの言葉にも、癒されることはありませんでした。彼女のそばには、町の人が大勢付き添っていました。しかし最も愛していた人、自分が最も頼りにし、大切にしていた人を失った彼女は、流す涙すら失っていたのかもしれません。

私に何ができるか

このような経験、言葉もなく嘆き悲しむ人のそばにいる、という経験は、私たちにも、それぞれにあると思います。教会の仲間が愛する人を神様のもとに送ろうとする葬送式において、私たちはどのように、その人にかかわることができるのでしょうか。あるいは、厳しい病状にある仲間をお見舞いした時、私たちはその人に何と声をかければよいのでしょうか。正直に申しあげますと、私自身もいつも悩むことです。牧師だから何か声をかけなければ、と思ってしまうのですが、本当のところは、かける言葉すら失ってしまうこと

があります。余計なことを言ってしまうと、家に帰ってから悩むこともしばしばです。イエス様なら、どうなさるのだろうと考え込んでしまいます。

共に歩むイエス

実際、そのような彼女に対して、イエス様はどんなさったでしょうか。聖書はこの息子を生き返らせた、私たちには決して行うことのできない奇跡を記しています。このような奇跡が本当に起こったのかどうか、実のところは分かりません。聖書にそう書いてあるのだから、素直に信じてよいのでしょう。しかし明らかなことは、イエス様は、彼女を憐れに思われたのです。「憐れに思う」とは単に同情するといったことではなく、自分のはらわたを引きちぎるぐらいの痛みを感じるという意味だそうです。自分自身がけがをすれば、どれほど痛いか自分には分かりますが、他人の痛みというのはどれほど痛いか、残念ながら私たちは感じることはできません。せいぜい自分の過去の痛みの経験で類推する以外、方法はないわけです。けれどもそれが、相手を感じている痛みと同じなのかどうかは、はっきりとは私たちには分かりません。しかし、イエス様は彼女の痛みを、ご自身の痛みと全く同じように感じてくださったというのです。

そしてイエス様は彼女に近づいていかれ、この女性の悲しみ、心の痛みのもとである棺と共に歩み始められたのです。それを見ていた人々は「神はその民を心にかけてくださった」と、驚きの声をあげて言います。これは奇跡を見ただけではなく、イエス様のこの母親へのかかわりを見てそう言ったのです。

心にかける

私たちが、心に痛みを負っている人にできることは、そうたくさんはないかもしれません。しかし、「心にかける」ことはできます。心にかける、その痛ましい出来事をいつまでも心に刻んで覚える、その人々の心の傷が癒されるように祈る。これなら私たちが直接知らない人に対してでも、会えなくてもできることでありましょう。教会の仲間に対してはもちろんのこと、今日、私たちがテレビや新聞のニュースで知った、この世界の中で苦しんでいる人々のことにも注意と関心を向け、「心にかけて」、そのことを覚え祈りたいと思います。

実は私も、21年前の阪神淡路大震災の時、震災の翌日から再開した神戸聖ミカエル大聖堂の聖餐式の代祷で、私たちが世界の教会のために祈ると同時に、世界の教会の方々が神戸の被災者のために祈ってくださることに、突然気づかされ、涙がこぼれたという経験があります。それと同じように、私たち自身に苦しいことや悲しいこと、つらいことがあった時、必ず誰かが、家族や教会の仲間が、私たちのつらさを覚えて、心をかけてくれている、祈ってくれていることに気づきます。そして、その祈りの先にイエス様のお姿が見えてきます。名前も伝えられていないナインのやもめに心をかけてくださったように、私たちがつらい時、家族や教会の仲間の祈りを通して、イエス様は必ず、私たちにも心をかけてくださる、イエス様は苦しみ悩む人と共に、必ず歩んでくださる、そのことを覚え、日々を過ごしていきたいと思います。

父と子と聖霊の御名によって アーメン